◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第16回／彫刻家ブランショと朝香宮──パリの想い出を胸に（その1）

Residence of Prince Asaka 1933—

図1

旧朝香宮邸の大広間と大食堂に作品を残したフランス人彫刻家、I.L.ブランショ（図1／左）。かつては彫刻家であるということ以外、彼についてはほとんど何も知られていませんでした。しかし、当館所蔵の「受領証」調査や展覧会準備の過程などにおいて、近年少しずつ新たな情報が発見・蓄積されつつあります*。その概要は一昨年開催した「アール・デコ様式（スタイル） 朝香宮がみたパリ」展で紹介しましたが、ここで改めて情報を整理し、ブランショと朝香宮邸誕生の謎に迫ってみましょう。

現在、当館には、ブランショによって制作された允子（のぶこ）妃殿下の小立像が残されています（図2）。颯爽とした妃殿下の姿を写したこの彫像の台座には、"TRÈS RESPECTUEUX HOMMAGE I.L.BLANCHOT 1925（献呈I.L.ブランショ 1925）"と刻字され、作者から妃殿下に献上された記念品であることがわかります。このことから、彼は両殿下の滞欧中に、お二人と私的な交流のあった彫刻家であると推測されてきました。

これを裏付けるように、両殿下滞欧中の受領証を綴った「受領証綴」の調査により、ブランショはパリで妃殿下に水彩画を指導していたことが明らかとなりました。ブランショが白金台の宮邸新築に際して作品を提供した背景には、滞欧の想い出と共に、彼の作品を内装の一部に用いたいと願う両殿下の強い意志があったと想起することもできるでしょう。ではこの彫刻家は一体どのような経歴の持ち主だったのでしょうか。

パリの国立公文書館に所蔵されている自筆記録などによれば、I.L.ブランショ（イヴァン＝レオン・ブランショ）は、1868年11月25日に軍人の父と貴族の血を引く母の長男として、フランスのボルドーに誕生しました。地元の美術学校で彫刻を学んだ後、パリに出て彫刻家として活動を始めたブランショは、1893年頃よりフランス芸術家協会の会員となり、展覧会（サロン）への出品を行っています。主な作品は《フランソワ・ヴィヨン像》（図3）など、アカデミックで写実性の高いものが多かったようです。多くの賞牌（メダル）も制作していますが、残念ながら彼の作品として特定できるものは見出せていません。また公文書館に残された記録からは、1900年頃より彼の作品が国家によって買い上げられていたことが判ります。そのほとんどが大理石か石膏の胸像彫刻で、彼がこの分野を得意としていたことが窺えます。

彫刻家としての地歩を着実に固めていたブランショに転機が訪れたのは、1914年11月のことでした。第一次世界大戦勃発に際し、自ら志願して軍人となったのです。（次号へ続く／牟田）◆

図2

図3

図1. ブランショ（左）と胸像のモデルとなった男性。
撮影年不詳
フランス国立公文書館蔵

図2. ブランショ《朝香宮允子妃殿下小立像》1925年
東京都庭園美術館蔵

図3. ブランショ《フランソワ・ヴィヨン像》撮影年不詳
フランス国立公文書館蔵
*1928年のフランス芸術家協会サロン出品作。

*「受領証綴」の調査の成果は、美術館ニュース第18—20号の連載に詳述されています。